

第84回麻布獣医学会 一般演題5

飼育ネコのトキソプラズマ症感染実態調査

小泉 典代¹, 大西 義博², 井澤 甲二³, 松田 健治³, 西村 和彦², 木村 明生⁴

¹東大阪市動物指導センター, ²大阪府立大学, ³東大阪市食品衛生課, ⁴大阪府立公衆衛生研究所

〔目的〕感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律により、動物由来感染症を含む感染症のサーベイランスが重要な施策の一つとなり、国においては「動物由来感染症予防体制整備事業実施要綱」を定め、その推進を図っている。当市でも、平成12年度に動物由来感染症対策検討会設置要綱を定め、飼育動物の感染実態を調査して結果を公表するとともに、動物由来感染症に関する正しい知識と情報を提供している。

さて、トキソプラズマ症は、ネコの糞便や完全に加熱されていない豚肉等の中に入っているトキソプラズマ原虫 (*Toxoplasma gondii*) を経口的に摂取することにより感染する。ヒトの多くは不顕性感染で発症しないが、免疫不全患者のトキソプラズマ脳炎や、初感染の妊婦の流産や胎児の障害などを引き起こすことがあり、動物由来感染症の中でも重要な位置を占めている。そこで今回、市内で飼育されているネコについて感染実態を調査検討した。

〔方法〕市内の動物病院に来院したネコについて、飼い主に調査内容を説明して了解を得た後、飼育状況についてのアンケート調査を行い、検体として血液または糞便を採取した。

血液はラテックス凝集反応（トキソチェックーMT 栄研）、糞便はショ糖液遠心浮遊法並びにMGL法により検査を実施した。

〔結果〕平成18～20年度に216頭のネコから血液194検体と糞便160検体を検査したところ、血液1検体が陽性（×29）、1検体が擬陽性（×25）を示したが、糞便検査ではすべての検体からトキソプラズマのオーシストは検出されなかった。

また、飼育状況のアンケートでは、室内のみで飼育されているネコが73%、キャットフードのみを食事として与えられているネコが69%と多かった。

〔考察〕近年、ネコの飼育はキャットフードを与えて室内飼育をする傾向があり、トキソプラズマ症に感染する機会は減少していると考えられるが、今回の検査では血液検査で陽性例と擬陽性例が各1例確認された。飼育状況のアンケートでは、この2例のネコは室内飼育でキャットフードのみを与えられていたが、飼い主の知らない間に外出して感染した可能性がある。

これらの例では、糞便検査でオーシストの排出が確認できず、ネコの健康状態に異常はなかったが、抵抗力の減弱や免疫機能の低下により病原性を示す可能性があり、後日、再検査を行ったが、血液の抗体価に変化はなく糞便検査でもオーシストの排出は認められなかった。

なお、検査結果は採取担当獣医師から飼い主に連絡し、感染予防対策の指導を行った。

また、調査結果の情報提供として、一般市民向けに保健所ホームページで公表して感染予防対策の啓発を行い、獣医師等専門家向けに、文書による報告、会議での説明を行った。

最後に、今回の調査に関して東大阪市獣医師会ならびに東大阪市動物由来感染症対策検討会のご協力、ご指導をいただきましたことを深謝します。あわせて、本事業は厚生労働省感染症予防事業費等国庫負担金及び補助金の援助を受け実施したものであり、関係各位にお礼申し上げます。